

大阪市生野区におけるデイサービスを拠点とした
在日コリアン高齢者の地域生活とその特性

黒木 宏一*

Based on Day Service in Ikuno-ku, Osaka
Community Life and Characteristics of Korean Elderly in Japan

KUROGI Hirokazu*

Abstract

The purpose of this study is to clarify the actual conditions of elderly persons living their lives independently as subjects, to identify its constituting factors and to investigate the directionality of elderly persons' welfare. In order to do so we will focus on the welfare services that support the community living of Korean elderly persons in Ikuno Ward, Osaka City, where local resources and communities are abundant. The results of this study can be summarized as the following:

- (1) Korean elderly persons living in Japan can realize their independent living by receiving close support of the family living nearby.
- (2) For their community life, they actively utilize local resources such as parks, public baths, supermarkets, coffee shops, hospitals, etc. In this way, a diversified and high-quality community is formed, where reciprocal support between elderly can be created.
- (3) In case there are day services located closely to local resources and the elderly persons which utilize these, it will procure a mechanism which enhances their independent living.
- (4) The factors of how the space in the day services is created and how activities are being provided, heavily influence the elderly persons' behavior.

キーワード：在日コリアン高齢者，地域生活，地域資源，暮らしの自律，デイサービス

Keywords: Korean Elderly Living in Japan, Community Life, Local Resources, Independence of Living, Day Service

* 新潟工科大学工学部工学科（建築・都市環境学系）；Division of Architecture and Urban Environment, Department of Engineering, Niigata Institute of Technology

はじめに

1 研究の背景

大阪市生野区は、在日コリアン高齢者（以下、在日高齢者）の集住地域であり、在日コリアン同胞のコミュニティ、豊富な地域資源が存在する。本研究は、こうした在日コリアンの同胞意識や共通の生活体験から裏付けされた、より共同性の高い高齢者の地域生活や、日常生活の実態を捉えるものである。筆者は、建築学を専攻とし、特に高齢者施設の計画手法や高齢者の地域生活のあり方に焦点を当てた研究を行ってきた。本研究は、社会学や人類学とは異なった視点でのアプローチではあるものの、在日コリアン高齢者が日本の中で長年培ってきた独自のコミュニティから生まれる、地域生活や暮らしぶりを評価し、改めて在日高齢者のみならず、日本に住む高齢者全体の、より豊かな高齢期の暮らし方や、介護サービス、生活環境のあり方を問うものである。

こうした研究の組み立ての背景には、日本における高齢者福祉の課題がある。

日本における高齢者福祉の現状は、介護保険制度の破綻に伴い、入所施設建設の制限や凍結が図られ、2006年の改正では、地域密着サービスの強化、介護予防の推進など、施設入所をいかに防ぐかという方向に向かっている。こうしたカネ（公的財源）・モノ（施設）を基盤とした高齢者福祉の制度に限界を迎えている日本において、カネ・モノを基盤とした介護保険制度に依存せず、地域に潜在的に存在するコミュニティ、人的ネットワーク、高齢者が過ごす場として活用可能な地域資源（公園や銭湯、その他の生活の場）を利用しながら、高齢者が如何に自律的に暮らしていくか、その方向性を探ることが、在日高齢者のみならず、日本に住む高齢者全体の福祉の発展に寄与し、生野区における在日高齢者の地域生活には、その知見を得るための、潜在的な要素が数多く散見される。

加えて、日本の福祉制度は、北欧型の福祉サービスを基盤としており、日本の高齢者の生活歴・趣味・習慣とはかけ離れたサービスになっている嫌いがあり、結果として、利用高齢者もサービスを受動的に受ける過ごし方に陥っている現状も垣間見える。高齢者が生き生きと主体的に過ごせる施設のあり方、脱施設化に向けたあり方も検討すべきである。この課題に対しても、本研究の調査対象としているデイサービスの事例の中には、在日高齢者の民族性や趣向に合わせた取り組みを実践しているものもあり、脱施設化に向けた方策も得られる可能性がある。

2 研究の目的

本研究は、生野区の在日高齢者の地域生活や地域生活を支える福祉サービス（デイサービス）の過ごし方に焦点をあて、その実態の中から、高齢者の主体的・自律的な暮らしの側面を評

備し、その要因を明らかにすることで、在日高齢者のみならず、日本で生活する高齢者のこれからの高齢者福祉のあり方・方向性を検討することを目的とする。

在日コリアン集住地域に着目することは、在日コリアンという民族意識や、日本におけるマイノリティ意識も、サービスの内容や高齢者の暮らしに大きな影響を与えていることが考えられるが、生活歴・民族性を反映したサービス、高齢者福祉に依存しない生活の実態、地域資源の活用といった、今後の日本の高齢者福祉を考える上で、重要な知見が散在しており、こうした知見を整理することで、地域に暮らす高齢者本位の主体性・自立性を有した生活環境のあり方を検討する。

3 先行研究と本研究の位置づけ

筆者が専門としている建築学、特に建築計画学分野において、在日コリアンの居住地域、暮らしや住まいに関する研究はいくつか散見される。韓や布野らによる、在日コリアンの集住地区に着目した、その地域に定住していく過程や、その変容を捉えた研究〔韓勝旭・布野修司・リムボン 2006〕、在日コリアンの居住空間に着目した、アイデンティティや住まいの構成〔金賢淑・谷直樹 2007〕、長屋における集住の様相などを明らかにした研究〔韓勝旭・布野修司・リムボン・神吉紀世子 2007〕などがあり、社会学、人類学、地理学などと同様に、建築学的な視点での在日コリアンの歴史や暮らしなどを詳細に捉えようとしている。

本研究は、既往研究を踏まえた上で、在日コリアン1世が高齢化する中で、長年暮らしを営んできた同胞の集住地域に、高齢期となった今日、どういった暮らしぶりが展開しているのか、その実態に迫ると共に、同胞意識や暮らしの経験、同胞の高齢者の集住性が、その暮らしにどのような影響をもたらしているのかといった観点から、在日コリアン高齢者の暮らしの特性を明らかにする。

合わせて、研究の目的にも示したように、在日コリアン高齢者の暮らしの中には、今後の日本の高齢者の暮らしや生活環境の質を高める諸要素が秘められており、それらを明示することも本研究のいま一つの狙いである。在日高齢者のみならず、広く日本で暮らす高齢者の自立した暮らしに求められる地域環境、デイサービスの通所施設の環境がどうあるべきかを整理するといった、従来の在日コリアン研究とは異なる観点を有する研究である。

4 調査方法

調査は、下記に示す3つの方法をとった。(調査期間：2009年7月～2010年2月)

①生野区にあるデイサービスの中から、通所利用者における在日高齢者の割合、通所範囲の違いなどから3事例を選定し、運営者に対する利用者の属性や、地域生活、デイサービス内でのプログラムや支援の内容に関するヒアリング調査を実施した。

②デイサービス利用者に対して、日常生活・地域資源の利用などに関する聞き取り調査を実施した。

③デイサービスにおける利用者の過ごし方を把握するための非参与型の観察調査を実施した。

上記の調査により、在日コリアン高齢者の暮らしの実態を詳細に把握するとともに、地域資源やデイサービスの利用が、在日高齢者の暮らしにどのような影響をもたらしているのか、また、高齢者の自立した地域生活に如何に寄与しているのかを分析する。

なお、調査に関する倫理的配慮として、個人情報や施設情報に関しては、個人・施設運営者が特定されない形で研究のみに使用する旨を運営者に説明し、了承を得ている。

なお、本研究は、10年前の調査データをもとに考察を行っており、今日の多様化する高齢者の福祉サービスにどう意味を持つか、といった議論もあるものの、在日1世の高齢者の生野区における当時の暮らしや、その暮らしを支える地域資源やデイサービスのありようの記録としての有用性、かつ、それらの中から得られる今日的な福祉環境のあり方の有用な知見は、決して色あせるものではなく、十分にその地域性や民族性を反映させる環境づくりに活かせる、といった立場をとっている。

5 事例概要

調査対象の3事例の概要を図1に示す。

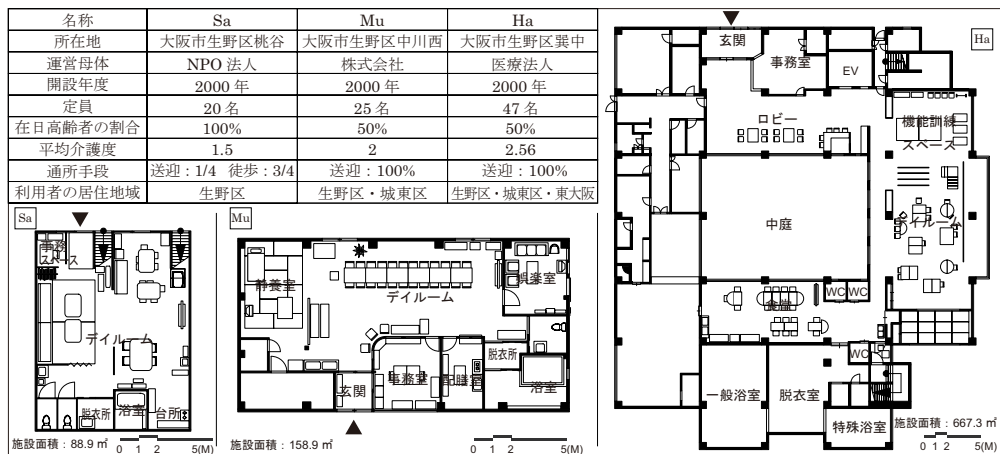


図1 事例概要・事例プラン

出典：筆者作成

< Sa >

定員20名で、利用者は全て在日高齢者である。利用者の平均介護度は1.5と、軽度である。利用者の大半(3/4の利用者)は徒歩で通所しており、利用者の居住地域は在日高齢者の割

合が高い生野区に集中している。デイサービス施設の規模は、アパートの1階にあった2住戸を改修してデイサービスとしているため、他の事例と比べ、88.9㎡と小規模な空間となっている。

< Mu >

定員は25名で、利用者は5割が在日高齢者、残り5割が日本人高齢者である。利用者の平均介護度は2と、Saと比べると若干重度である。利用者は全て車による送迎で通っており、生野区以外に城東区から通所している利用者も存在する。施設は新規に建築された空間であり、静養室・娯楽室とデイスペース以外の空間も存在し、その空間構成は、デイサービス施設の必要諸室を満たす日本における一般的なデイサービス施設空間となっている。

< Ha >

定員は47名と、他の事例と比べると最も定員が多い。利用者の平均介護度は2.56と他の事例と比べて最も重度である。全ての利用者は送迎で通所しており、生野区・城東区・東大阪と広範囲から通っている。施設は、老人保健施設の1階部分にあり、面積も667.3㎡と大規模であり、日本のデイサービス施設においては、入所施設併設型の一般的な例である。

このように、3事例それぞれ、定員規模、施設規模、利用者の属性、在日コリアン高齢者の割合が異なり、この違いが在日コリアン高齢者の生活に如何に影響を及ぼすかを考察する。

6 ヒアリング対象者の属性 (表1)

認知症の程度などを考慮し、聞き取りが可能な方をスタッフに選出してもらい、Saで10名、Muで3名、Haで6名の利用者にヒアリング調査を実施した。

ヒアリングを実施した高齢者19名のうち、18名が女性であり、女性利用者の割合が高い。Saの利用者は要支援2～要介護度1と、自立度が高い。MuやHaでは、要介護度2～4程度で、自立度が低い利用者が大半を占める。出身は、済州島出身者が10名、韓国半島部出身者が7名、日本出身が1名と、済州島出身者以外の高齢者も多く存在している。デイサービスの利用頻度は、Saで週4回、Muで週3回、Haで週2回と、介護度の平均が低いSaで多くデイを利用している。年金は1名しか受給しておらず、逆に生活保護受給者は19名中12名と、大半の高齢者が生活保護を受けて暮らしを成り立たせている。

I 在日コリアン高齢者の暮らしの実態と地域資源の活用

1 日々の暮らしと家族の支援 (表2)

高齢者の世帯構成は、一人暮らしが19名中14名と、7割を占め、殆どが独居の状態である。子供世帯の居住地は、同居が5名、近居が10名と、8割近くが高齢者の居住地の近隣に

表1 ヒアリング対象者の属性

利用者	年齢	性別	介護度	ADL	認知症の程度	出身地	居住地	利用頻度	生活保護	年金
Sa-01	86	女	1	—	—	済州道	桃谷3	週6	5/10	1/10
Sa-02	75	女	2	—	—	韓国	北巽	—		
Sa-03	74	女	1	—	—	日本	中川東	週6		
Sa-04	87	女	1	—	—	韓国	桃谷3	—		
Sa-05	84	女	1	—	—	済州道	鶴橋1	週5		
Sa-06	82	女	1	—	—	済州道	桃谷4	週6		
Sa-07	91	女	1	—	—	済州道	中川5	週3		
Sa-08	86	女	1	—	—	—	勝山北	週4		
Sa-09	86	女	要支援2	—	—	済州道	桃谷5	週1		
Sa-10	81	女	要支援2	—	—	済州道	桃谷4	週4		
Mu-01	82	女	2	—	—	韓国	北巽	週4	○	×
Mu-02	73	女	2	—	—	済州道	中川西	週2	○	×
Mu-03	88	女	2	—	—	慶尚南道	田島4	週4	○	×
Ha-01	86	男	2	A2	I	済州道	東大阪	週2	○	×
Ha-02	79	女	3	A1	I	忠清南道	勝山北	週2	○	×
Ha-03	93	女	4	B1	なし	済州道	勝山南	週1	○	×
Ha-04	87	女	2	A1	I	済州道	鶴橋4	週3	×	×
Ha-05	80	女	1	A1	なし	忠清南道	桃谷4	週2	×	×
Ha-06	87	女	2	J2	I	慶尚南道	東大阪	週2	○	×

注：出身地で「韓国」とは、出身道の不明な場合をいう。済州島が全羅南道から分かれて「道」となったのは1946年であるが、それ以前の出身者も便宜上「済州道」とした。

出典：筆者作成

表2 日々の暮らしの実態

利用者	世帯構成	家族の居住地	家族の行き来	食事	掃除	買い物
Sa-01	一人暮らし	近居	週に数回	自炊	自分	自分
Sa-02	夫・娘と同居	同居		自炊	自分	自分
Sa-03	一人暮らし	遠方	月に一回程度	ヘルパー	ヘルパー	ヘルパー
Sa-04	一人暮らし	近居	週に数回	—	—	—
Sa-05	娘と同居	同居		娘	娘	自分
Sa-06	一人暮らし	近居	週に数回	自炊	自分	自分
Sa-07	一人暮らし	近居	月に一回程度	自炊	自分	自分
Sa-08	娘と同居	同居		娘	娘	娘
Sa-09	一人暮らし	近居	月に一回程度	自炊	自分	自分
Sa-10	一人暮らし	近居	なし	自炊	自分	自分
Mu-01	一人暮らし	近居	週4	自炊	—	ヘルパー
Mu-02	一人暮らし	—	なし	自炊	自分	自分
Mu-03	一人暮らし	近居	毎日泊まりに来る	自炊	自分	自分
Ha-01	一人暮らし	近居	毎日	娘	娘	娘
Ha-02	一人暮らし	—	なし	自炊	自分	自分
Ha-03	一人暮らし	—	たまに	ヘルパー	ヘルパー	ヘルパー
Ha-04	嫁と同居	同居		嫁	嫁	嫁
Ha-05	娘と同居	同居		娘	娘	娘
Ha-06	一人暮らし	近居	息子宅に頻繁に宿泊	自炊	自分	自分

出典：筆者作成

表3 地域資源の利用

利用者	買い物	銭湯	公園	病院	カラオケ	喫茶店	デイ利用の契機	デイへの行き来
Sa-01	M スーパー	R 銭湯	×	K 病院	×	×	家族	徒歩
Sa-02	スーパー	○	—	○	×	—	友人	自転車
Sa-03	M, K スーパー	○	T 公園	K 病院	×	×	友人	自転車
Sa-04	—	—	—	—	×	—	友人	—
Sa-05	K 商店街	○	—	K 病院	○	○	通りがかって	電動カー
Sa-06	スーパー	R 銭湯	K 公園	○	×	×	友人	徒歩
Sa-07	K スーパー	—	T 公園	—	—	—	友人	送迎
Sa-08	K 商店街	×	—	—	—	—	—	徒歩
Sa-09	M, K スーパー	○	K 公園	—	○	○	—	徒歩
Sa-10	M スーパー	R 銭湯	×	○	×	×	病院の先生	徒歩
Mu-01	—	×	○	○	×	×	居宅介護事業所	送迎
Mu-02	スーパー	○	K 公園	K 病院	×	×	ケアマネジャー	送迎
Mu-03	スーパー	○	×	○	×	×	ケアマネジャー	送迎
Ha-01	—	×	×	K 病院	×	×	ケアマネジャー	送迎
Ha-02	スーパー	×	×	K 病院	×	×	友人	送迎
Ha-03	—	×	○	K 病院	×	×	—	送迎
Ha-04	—	×	×	K 病院	×	×	家族	送迎
Ha-05	—	×	×	K 病院	×	×	家族	送迎
Ha-06	スーパー	—	—	○	×	○	家族	送迎

注：地域資源の名称は図2. Sa 利用者の居住地域と地域資源と対応

出典：筆者作成

住んでいる。独居高齢者の中で、毎日もしくは、週に数回の頻度で家族の行き来がある高齢者は7名で、親密な家族の行き来があり、家族によって、日々の安否確認や健康状態の把握などの対応がなされている。独居高齢者の食事や掃除、買い物といった、日常生活の活動は、14名中9名が自活しており、介護度の違いによらず、本人の力で生活を組み立てている。

加えて、家族世帯の近居の場合が多いため、「娘が毎日来て食事や洗濯をやってくれる (Ha-01)」「息子が心配して、仕事帰りに家に寄って泊まってくれる (Mu-03)」「よく娘の家に泊まりに行っている (Ha-06)」など、家族による積極的な生活のサポートが行われている。

このように、生野区の在日高齢者は、日常生活の活動に関して、家族の親密な支援を受けながら、本人の力で生活を形成している。こうした支援が可能になるのは、生野区が在日コリアン集住地域であることで、子供世帯が独立した場合でも、同じ地域に暮らす傾向があり、結果として近居となるといった、生野区の集住性が大きく影響していることが考えられる。

2 地域資源の利用 (表3)

在日高齢者の暮らしに密着した地域資源の活用は、利用が多い順に、病院 (15)、スーパーや商店街 (13)、銭湯 (9)、公園 (7)、喫茶店 (3)、カラオケ (2) と、多岐に渡っている。買い物は、自宅付近のスーパーや商店街など、行きつけの資源を活用している。特に、M スー

パーやKスーパー、K商店街は、Sa利用者に共通して利用されている。銭湯の利用も多く、R銭湯はSa利用者によく利用されている。Sa利用者の多くは徒歩で通っており、居住地域が近い事と、Saの近所にMスーパー・Kスーパー、K商店街、R銭湯が立地しているため(図2)、共通した地域資源の利用に繋がっている。公園の利用は、Sa利用者で、T・K公園の利用が多い。この公園も、Saの立地している場所から100～500m圏内にあるため(図2)、徒歩での利用が可能となっていることが、利用の多さに繋がっている。病院の利用は、Sa・Mu・Haの利用者を問わず、共通してK病院の利用が多い。K病院の立地が、在日高齢者の居住地域(桃谷・勝山)に近いこと、加えて、在日高齢者を対象に、医療を受けやすい病院を設立したという経緯から、在日高齢者に受け入れられている事がよく利用されている要因である。また、カラオケや喫茶店の利用もみられ、在日高齢者はそれぞれの生活や趣味に合わせ、地域に散在するさまざまな場所(地域資源)を主体的に選択し、利用している。

また、デイサービスも一つの地域資源と捉えるのであれば、3事例それぞれに、異なる利用契機が見られる。デイサービスを利用するきっかけを見ると、Sa、Haでは、家族や友人の紹介、また、通りすがりでデイサービスを知ったといった利用の契機がみられる。一方で、Muは、ケアマネージャーや居宅介護事業所といった、一般的な日本のデイサービスと大差ないきっかけの利用が見られる。このことは、それぞれのデイサービスの運営主体が、Sa、Haでは、在日コリアンであるのに対し、Muでは、日本人の運営であることが大きく起因している。

3 地域資源を通じたコミュニティの実態と評価

前述した地域資源の活用とともに、それらの場所では多様なコミュニティが展開されている。ここでは、そうした地域資源の利用を通じたコミュニティが、在日コリアン高齢者の暮らしにとって、どういった意味や効果を持つのかを検証する。

以下、地域資源の活用に関する在日高齢者のコメントを示し、考察する。

<公園の利用>

「Saはね、ある日にね、T公園に行つてね、一人で寂しく暮らすのはいややつて、しょんぼり座っていたら、同胞のおばあちゃんが話しかけてきて。うちが今行つてるところ(Sa)紹介するからな、おいでつて。それで行つたんです。」(Sa-03)

「T公園は、以前は、ずっと行つてましたけどね。朝はね。行つてラジオ体操して、友達と行つて、モーニング食べて、家に帰つて。」(Sa-07)

「K公園あるでしょ。その公園にしょっちゅう行つてるわけ。K公園に行つたらね、火をおこしてからね、大勢のおばあさんたち(同胞)がいて、遊んでいるおばあさん達が

いっぱいおるねん。お菓子でも買って行って、渡したらね、みんながよろこんで、食べながら、遊んでくれるおばちゃんたちがいっぱいおるからね。うちも一緒に行くねん。」
(Mu-02)

<病院の利用>

「K病院での知り合いは多いです。9時から病院始まるから、8時半ぐらいに、ヘルパーさんがつれてくれるんです。病院に着いたら、9時まで、15分ぐらいかな。しゃべったり、笑ったりして。」(Ha-03)

「K病院に行ってみたら、患者さんがSaのオムニで、病院終わってSaに来たら、こっちにも来ていて。向こうで会って、こっちでも会って。」(Sa-01)

「病院って、結構、お年寄りの集まり場所だから。普通、病院は体が悪い時にいくじゃないですか。みな、お年寄り日課のように行くから。何々さん来てなかったら体調悪いかなって。」(Mu スタッフ)

<銭湯の利用>

「ちょっと何日か銭湯にいけへんかったら、何でいけへんのって誘いにも来てくれるし。そして、そこで遊んで帰ってきますねん。」(Sa-09)

「お風呂行って、一回、二回いったら、この頃みいへんねって。あんたみいへんから、病気で寝てるかと、死んでるかちゃうかって。そんな言われて。」(Mu-03)

「近所風呂あるねん。風呂屋さん。ほんまに近所や。そこ行くし。そこ行っても知り合いばかりやから。」(Ha-06)

<喫茶店・カラオケの利用>

「今朝、そこ、近くの喫茶店にちょっと寄って。どこでも、気が向いた所に行きますねん。ここって決まってないからね。ここらへんは、朝鮮の人が多いですわ。喫茶店は。そやから、だいたい顔なじみ。」(Sa-05)

「朝は、たいがい喫茶店。喫茶店に行ったら友達いっぱいいるから。行くときは一人やけど、行ったら、いっぱいいるから。」(Ha-06)

「カラオケは一人で入るけど、行ったら、知り合いばかり。」(Sa-10)

(1) 公園コミュニティ：「T公園でオムニと出会い、オムニが通うデイサービス(Sa)を紹介してもらった(Sa-03)」「T公園に友達と一緒にラジオ体操をしに行き、モーニングを食べる(Sa-07)」「K公園に同胞の高齢者が集まり、お菓子などを持ち寄って一緒に過ごす」

というように、地域の公園は、様々な高齢者の出会い・語らいの場となっており、他者との関わりが希薄になりがちな高齢者にとっての、ひと・同胞との繋がりを保つ貴重な場所になり得ている。また、こうした出会いの場が、デイサービスの存在を知るきっかけにもなっており、暮らしに根ざした情報を得る場としても機能している。

(2) 病院サロン：「K 病院が始まるまで、待合で知り合いの高齢者とおしゃべりをしたり、笑ったりして過ごしている (Ha-03)」 「K 病院に行ったら同じデイサービスに通う利用者とお会って、病院が終わってデイに行ったら同じ顔があった」というように、通院の多い高齢者にとって、病院は単なる医療を受ける場だけでなく、高齢者が集う「サロン」の場、コミュニティの場として、また、デイサービス以外に仲間と出会う場所としても活用されている。また、「病院で見かけないから体調が悪いのかと気にかける (Mu スタッフ)」といった、高齢者同士が安否確認する場所ともなっている。

(3) 銭湯コミュニティ：「近所の銭湯によく行くが、知り合いばかり (Ha-06)」というように、銭湯は、知り合いと日常的に顔を合わせる場所になっている。また、「銭湯に顔を見せなかったら誘いに来る (Sa-09)」 「たまに銭湯に行ったら、病気で寝込んでいるかと心配された (Mu-03)」 というように、日常的に通う銭湯だからこそ生まれる「ご近所さん」ならではの安否確認の場所ともなっている。在日高齢者の自宅に風呂がないケースも多く、自宅以外での入浴の場が、結果として高齢者同士の集の場として機能している点は、この地域での特徴、在日コリアン高齢者ならではの特性とも言えるであろう。

(4) 喫茶店・カラオケコミュニティ：「喫茶店に行くといつも顔なじみや友達に会う (Sa-05・Ha-06)」 「カラオケに一人で行くが、行ったら、知り合いばかり (Sa-10)」 というように、高齢者の楽しみやくつろぎの場である地域の喫茶店やカラオケ店においても、友人・知人と「いつでも出会えるコミュニティの場所」となっている。

このように、公園のような場所では、不特定多数の同胞の高齢者とのコミュニティが、病院や銭湯など、日常的・定期的に利用する場所では、知人・顔なじみの高齢者との普段の出会いの場・安否確認の場として、独自のコミュニティが生まれている。加えて喫茶店・カラオケなど、趣味やくつろぎの場では、友人・知人を求めて一緒に楽しむ場として活用されている。高齢者が地域資源を主体的に利用する事で、副次的に形や質の異なるコミュニティが生まれている。

4 徒歩圏内のデイサービス・地域資源の立地と高齢者の自立的生活の構築 (図 2)

図 2 は、Sa における利用高齢者の居住地と、地域資源をマッピングしたものである。Sa の利用者は徒歩で通う利用者が多い。その理由として、Sa が立地する場所が、在日高齢者の集住地区の中心に位置していることが要因の 1 つとして挙げられ、利用者の多くは、Sa の近

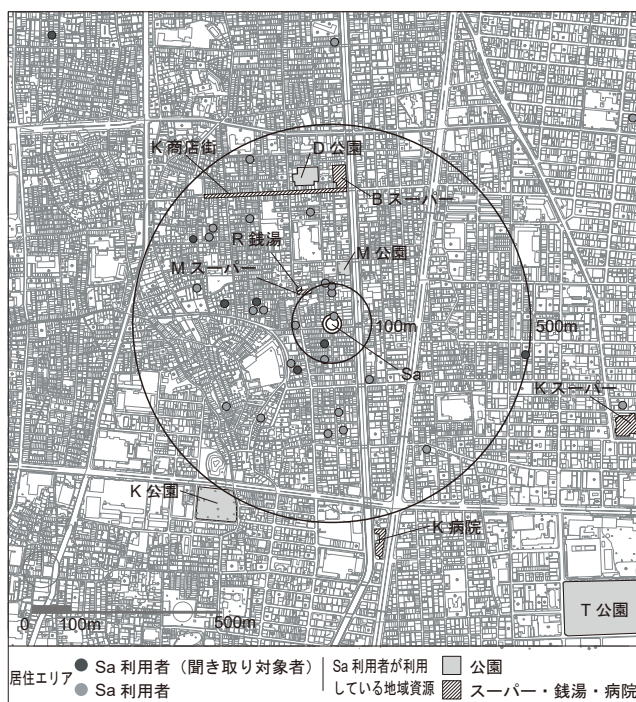


図2 Sa利用者の居住地域と地域資源

出典：筆者作成

隣居住者である(図2)。また, Saを中心にして, 利用者がよく利用しているスーパーや商店街, 銭湯, 公園が徒歩圏内(500m圏内)に集中している(図2)。

こうしたデイサービスの立地と, 利用者の居住地, 地域資源の近接性が, Saの利用者の暮らしに大きな影響を与えている。この影響について詳しく見ていきたい。

以下は, 地域資源の具体的な利用と生活への影響, 効果が読み取れるコメントである。

「デイの帰りにMスーパー入って, 野菜とかちよっと買ってこようかなと思って, 入って, 野菜とか買っていきます。」(Sa-01)

「なんか買い物でもあったら, 帰りにちよっとK商店街に寄って。まあ, 特別用事がなかったら, ここから鶴橋まで割と距離があるからね。知ってる人でも会ったら, そこに寄って遊んだり。友達多いから。」(Sa-05)

「デイが終わったら, ぶらぶら40分かけて歩いて, 景色見たりして帰ります。この花きれいやなとか, ここのおうちはきれいやなとか, いろいろ見ながらしながらね, 帰りますねん。そうすると気が晴れる。」(Sa-03)

「朝起きて、6時ごろK公園行って。6時半ごろラジオ体操してるから、ちょっと体動かすために。」(Sa-06)

「K公園毎日歩いています。その運動はしています。そないして、リハビリ変わりにして、病院代助けてます。」(Sa-09)

「自転車でSaまで来てますねん。自転車で自分で来ないと、頭がぼけるから。」(Sa-03)

「あのね、二～三日家におったらね、頭ぼけてくるでしょ。それで、カラオケに週に一回行くこともあります。」(Sa-10)

「足が悪いから、なかなか歩かれへんからね。デイの帰りにMスーパーに寄って買い物して帰ります。」(Sa-10)

(1) デイの利用をきっかけとした地域資源の利用：「デイの帰りに近所のスーパーによって買い物を済ます(Sa-01)」 「鶴橋からわざわざこの近所までくることはないが、デイに(電動カーで)通うことで、帰り際に知人や商店街によって帰る(Sa-05)」 というように、デイサービスに徒歩や電動カーなど、本人が自由に移動できる手段で通うことで、その行き帰りに、地域資源の利用や、友人と出会う場面が生まれており、デイサービスの利用が、様々な相手や出来事、場所と触れ合う状況を作り出している。

(2) 生活の張り：「デイから家までの帰り道にいろいろなものを見て帰る(Sa-03)」 といった、帰りに出会うさまざまな風景やモノを楽しむことで、生活の張りや気分を晴れさせることに繋がっている。日本における一般的なデイサービスは、マイクロバスなどでの送迎が一般的であり、利用高齢者は、自宅とデイサービスとの door to door で、こうした状況は生まれにくい。利用高齢者が比較的ADLが高いこと、デイサービスと自宅とが近接していることで、こうした生活の張りが生まれる。

(3) 自律的生活の組み立て・自助力の発揮：「近所の公園に行ってラジオ体操をする(Sa-06・09)」 「ぼけないようにデイまで自転車で来る(Sa-03)」 「頭がぼけないようカラオケに行く(Sa-10)」 といったように、本人の身体能力の維持や、認知症の予防にと、近隣の地域資源を主体的に利用しながら、本人の生活を自律的に組み立てている。また、足が悪く、なかなか外に出ることがおっくうになる利用者が、デイの帰りに買い物を済ます(Sa-10)」 といったように、自助力、頑張りを発揮する機会にも繋がっている。

このように、デイと自宅、地域資源の近接性が、一般的な日本型のデイサービス利用高齢者において、課題となっている暮らしの単調さを乗り越えさせ、暮らしの芳醇化、自律化に寄与している。

在日高齢者の集住性を基盤とし、そのエリア内にデイサービスが立地していること、地域資源が在日高齢者の徒歩圏内に集約していること、日常的な同胞高齢者の利用があることが

大きく影響している。

II デイサービスの過ごし方からみる、寄り合いの場としての脱施設化の可能性

本章では、高齢者の地域生活を支える福祉サービスであるデイサービスでの過ごし方に焦点を当て、高齢者の暮らしに根ざしたデイサービスのあり方、主体的な過ごし方に転換しうる脱施設化にむけたデイサービスのあり方を検証する。

1 会話の発生状況からみた過ごし方の実態と特性（図3・図4）

図3・4は、高齢者同士の自発的な会話をカウントしたものである。デイサービスの利用時間に、調査員1名が滞在し、普段の過ごし方に影響が出ない観察ポジションを確保しながら、移動や滞在時間の記録とともに、会話の数をカウントし、集計を行った。

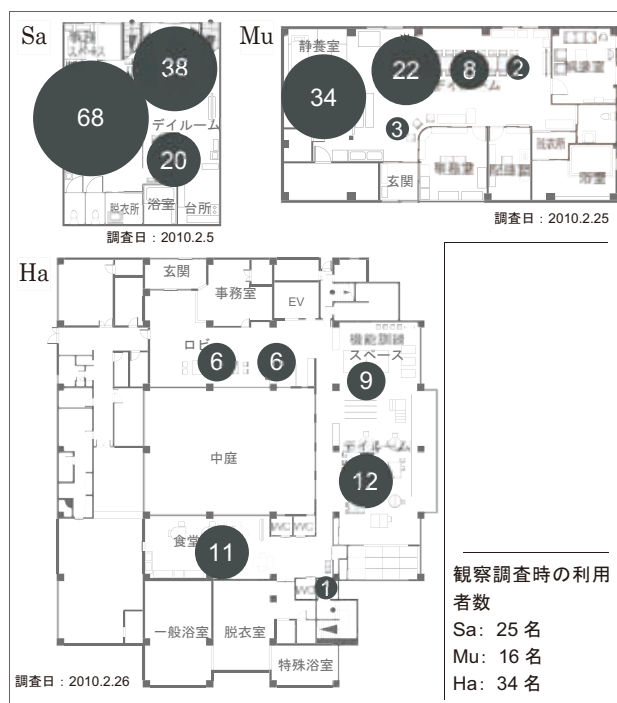


図3 空間別にみる会話発生数

注：●の大きさは会話数の大きさを、数字は会話数を示す。なお、会話数の算出は、昼食時以外の時間で、5分ごとに利用者同士の会話のみをカウントし、会話の始まりから終わりまでを1カウントとしている。

出典：筆者作成

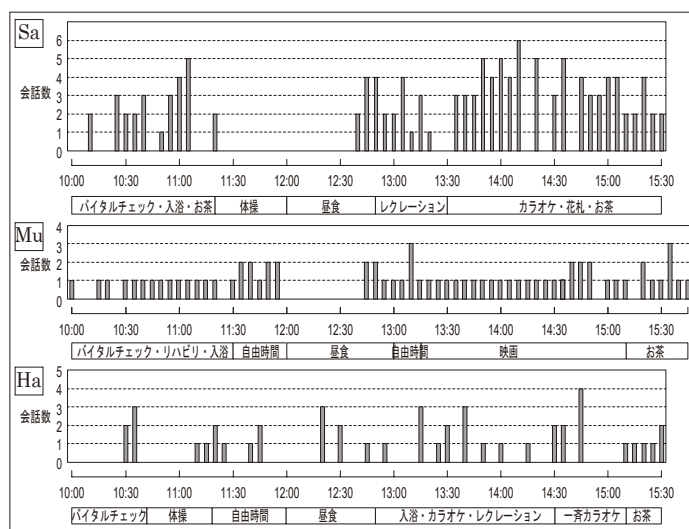


図4 時間経過にみる会話の発生状況

出典：筆者作成

全体の会話数は、Saで126回と圧倒的に多く、次いで、Muで69回、Haで44回である。空間別の会話数（図3）は、Saの絨毯とソファがおかれたスペースが最も多く（68）、ついでSaのテーブル席（38）、Muの畳スペース（34）、Muのテーブル席（22）である。Haでは、他の事例と比べて、会話数がどの空間をとっても少ない。

図4は、時間別・活動別にみた会話数である。時間別にみても、Saでの会話の発生が活発である。特に午後からのカラオケ・花札の時間帯で、会話が頻繁に発生しており、利用者が思い思いにカラオケや花札に興じて、賑わいのある過ごし方を展開している。一方で、Muでは、昼食の時間を除き、常に1回程度の会話数が継続している。Haでは、単発的に会話が発生している。これらの事例では、Saに比べると活動への主体的な参加が乏しく、会話の少なさに繋がっている。

2 デイサービス利用者の過ごし方に影響を与えている要素

下記に、主体的な活動への参加、賑わいや活発さに影響を与えている諸要素を整理する。

(1) スタッフの働きかけによる過ごし方への影響：Saでは、一斉形式の活動が体操・レクリエーション程度で、他の時間は各々が自由に過ごしているものの、MuやHaでは、映画（Mu）や、体操・カラオケ・レクリエーション（Ha）といった、一斉形式の活動の時間が長い事で、高齢者同士が自由に会話する時間帯が少なくなり、結果的にスタッフ主導の活動に受動的に参加する傾向がある。特にSaでは、在日高齢者がよく遊んでいた「花札」や、故郷を思い出す

ような歌（イムジン河）のカラオケなど、自由な時間の中で、さりげなく民族性を配慮した活動が組み込まれていることも、会話の数の多さや、賑わい、活動への主体的な参加に繋がっている。

(2) 空間や家具の設えの影響 (図5) : カラオケを終えた利用者が、他の利用者が花札に興じている絨毯のスペースに立ち寄り、座り際に隣のオムニに話しかける (図5・Sa-1) といったように、椅子座と比べ、自由に座る場所を選びやすい床座であることで、固定された利用者同士だけでなく、さまざまな利用者と関わりを持ちやすくなっている。また、ソファに腰掛けて花札を眺めていたオムニが横から花札をしているオムニ達に話しかける (図5・Sa-2) といったように、ソファと床で花札をしている座卓との位置が近接して置かれていることで、自分の居る場所以外の活動に関わりやすい状況が生まれている。この事が、Saでの空間別にみた会話数が絨毯・ソファのスペースで多く発生している要因である。また、Saは、他の事例と比べると空間が狭小であるため、他の利用者との距離が近く、移動ついでに話をしたり (図5・Sa-2)、隣の利用者へ話しかけたり (図5・Sa-2) といった、周りの利用者への会話の派生が生まれやすい。一方で、図5・Mu-1や図5・Haのように、テーブル席の場合、座る場所が固定化してしまい、横、もしくは正面に座っている利用者だけの会話になりがちである。Muでも、畳スペースの床座の場合、畳でくつろぎながら会話をしていた利用者が、隣で寝ていたオムニに話しかけるといった会話の派生が生まれており、Saの床座と同様の過ごし方が見られ、結果Muでも畳スペースでの会話数が最も多いことに繋がっている。

このように、椅子座と床座の違い、家具の設置の仕方、空間の大きさが、利用者同士の過

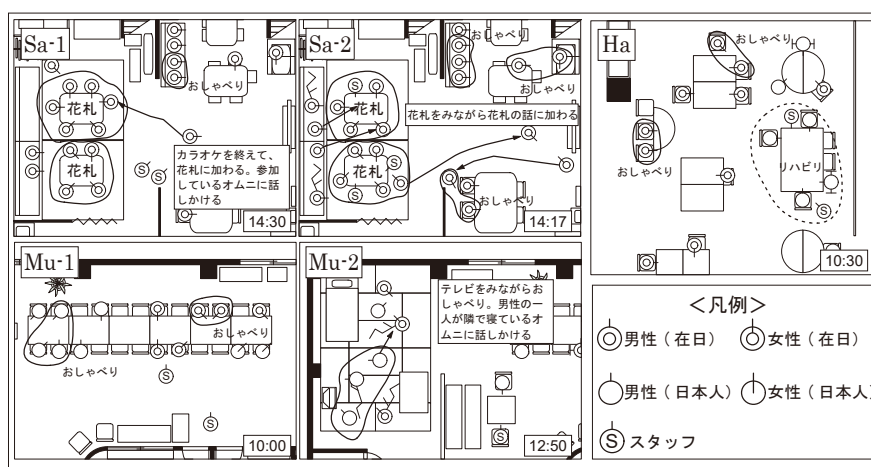


図5 高齢者同士の居方・関わり方

出典：筆者作成

ごし方に大きく影響を与えている。

(3) 利用者同士・スタッフとの共通性：ヒアリング調査や観察調査を通じて、Saの利用者やスタッフの会話は、「今日はどこスーパーが安い」「今日は帰りに銭湯寄っていくの?」「いつもどこの公園に行っているの?」といった、近隣の地域資源に関する会話が多く聞かれた。利用者がデイサービスの近所に住んでいることや、Saの近隣に多く地域資源があること、スタッフが地域の事をよく知っていることから、高齢者の暮らしに密着した会話が生まれている。利用者同士、利用者スタッフの関係の中で、在日であるという同胞意識に加え、同じ地域に住み、地域資源を利用することで生まれる共通の話題を互いが持つことで、会話の内容がより深まり、活発なやりとりが生まれている。

3 地域資源の一つとしてのデイサービスのあり方と「寄り合いの場」としての脱施設への転換

在日高齢者が集住する地域でのデイサービス、特にSaにおいては、その立地性や近隣に地域資源が多いこと、近所からの利用者の多さなどから、一般的な、いわゆる施設的なサービスと異なる場となっている。地域に広がる様々な地域資源を高齢者各々が利用しながら、利用する事で得られる様々な情報が、デイサービスにおいて持ち込まれ、会話を弾ませる話題になり、新しい情報を得る機会にもなっている。利用者も近隣に住む高齢者同士である場合も多く、顔見知り・馴染みの利用者と共に過ごす場所ともなっている。こうした暮らしに密着した要素(情報)や利用者同士の共通性がデイサービスに持ち込まれる事によって、利用者の主体性のある過ごし方や、賑わい・活気を生み出している。こうした賑わい・活気に引き寄せられるようにして、新たな利用者が通うようになる。友人を介したサービスの利用が多い(表4)のも、その事が起因していると言えよう。こうしたサービスは、言わば地域の「寄り合いの場」となっており、他のサービスとは質の異なる、「脱施設的な場」・「高齢者の暮らしに密着した場」となり得ている。

III まとめ

在日コリアン高齢者は、その多くは、生活保護や、無年金の中での経済的に苦しい暮らしを余儀なくされている。その一方で、家族の密接な支援や、地域に広がる地域資源を積極的に活用しながら、自律した暮らしを形成している。また、地域資源を活用することにより、暮らしの自律化・リズムを作り出すことや、同胞や知人と出会う機会に繋がり、多様な質・内容のコミュニティを作り出している。また、そのコミュニティによって、高齢者同士の安否確認・相互扶助が生み出され、介護サービスだけに依存しない、地域のヒト(同胞・知人)・

モノ（地域資源）・コト（コミュニティ）を基調とした暮らしを実現させている。

また、利用している介護サービス（デイサービス）においても、利用者の徒歩圏内にあるという立地性や、地域資源の近接性などにより、高齢者の暮らしに根ざした「寄り合いの場」として転換されており、より生き生きとした暮らしの実現に寄与している。

これらの状況が外的に計画されたものではなく、内発的に生み出されている背景には、一重に在日高齢者の集住地域であること、同胞意識といった精神的な基盤があることは言うまでもなく、そうした基盤の上で、デイサービスや地域資源が徒歩圏内に存在するといった物理的な立地性、民族性に配慮した施設内のプログラム運営といった要素が重層的に編み込まれているからこそ生まれている。

最後に、今後の高齢者福祉環境を考える上での方向性を下記にまとめたい。

- (1) 地域に散在する様々な地域資源を把握し、そこで生まれているコミュニティを支援に繋げることによって、より地域に根ざした豊かな高齢者の暮らしに繋がる。
- (2) 地域生活を支えるサービスとしてのデイサービスも、地域資源に近接した、利用高齢者の徒歩圏内に立地させる事で、地域資源の利用を促し、地域資源を利用することで生まれる多様なコミュニティへの繋がりを確保することに繋がる。
- (3) デイサービスの空間やケアのあり方も、大規模ではなく、狭小性を備えた空間を用意し、利用高齢者の関係を促すような設え、家具のセッティング、活動の提供が重要である。

参 考 文 献

〔日本語文献〕

金賢淑・谷直樹

- 2007 「居住空間における在日コリアンのアイデンティティについて——住生活に関する基礎調査」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』47: 965-968.

韓勝旭・布野修司・リムボン

- 2006 「土地所有関係の変遷から見る在日コリアン集住地区の形成過程に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』599: 95-101.

韓勝旭・布野修司・リムボン・神吉紀世子

- 2007 「権利関係から見た在日コリアンが集住する長屋ブロックの空間変容」『日本建築学会計画系論文集』619: 93-99.